

## 津波の教訓「稲むらの火」にみる住民避難の描写が日本と外国とで違う

———教訓話は史実にままあらず———

2013.10.05

最近、津波の教訓として「稲むらの火」がやたらともてはやされているが、我々が熟知する「稲むらの火」は実は史実にもとづいてつくられたフィクションである。我々はそんなこととはつゆ知らず、教訓を題目として唱えている。そこで、「稲むらの火」について真実は如何にと考え紐解いてみたい。

◆ 津波の教訓として小泉八雲が和歌山県広川村にいい伝たえられている話をまとめ出版した「稲むらの火」が実に有名である（もともと英語版）。たまたま、ニューヨークの図書館においてあった英語版「稲むらの火」の絵本を(友人を介して)見る機会があった。これを見てびっくり。我々が知っているストーリーとは大きく異なっていた。なぜこんなことが起こったのであろうか。その本質を探ることにした。

◆ そこでまず、日本の本と外国の本とについてストーリーをかいつまんでみよう。

(1) 日本の場合、昔(戦前)の国語の教科書に出ている話を紹介する。主人公浜口氏(庄屋)は海岸の波が引いたことにより津波の来襲を察知し、危険を村人に知らせるために、高台にある自分の田んぼで刈り取ってあった稲束に火をつけて急を知らせたとある。村人は庄屋さんのところが家事だといって高台に駆けつけたので、津波から難をのがれたのである。

(2) 英語本を紹介しよう。浜口氏は大変な勉強家であり、津波の知識を十分持っていた。あるとき海が引いていったことから津波の来襲を察知した。ここまではいいが、これ以降が日本の本とまったく違うのである。彼は、津波の来襲を村人に走って言いまわって、村人を高台に避難させた。また、夕暮れ時から夜にかけて、災難にあった方々が高台を目指して避難できるように、高台の場所が(目印として)わかるように稲束を燃やしたのである。しかも、この本のいいところは、復興として村人全員で後世のために防潮堤を築いたことを描いていることにある。

◆ 両者を見比べると、津波来襲の村民への伝達方法や稲束を燃やした意味がまったく違っている。英語本のほうが合理主義で持ってストーリーを書き換えたのではないかと思えたが、事實はそうではなかった。日本の歴史家の話によると、実際の話は英語版そのものであり、日本では国語の教科書に掲載するとき、自己犠牲による美談がことさら強調され意図的に書き換えられていたのである。しかも、本来なら後世にむけて、みんなで堤防を築いたくらいの話もあってもいいのに、そんな話もない。

また、津波来襲を知らせたのは、前述のように稲の燃焼による光ではなく、浜口氏およびその弟子が村中を駆けずり回っていたといわれている。英語版のほうが的確である。

さらに、英語版では、浜口氏が勉強家であり、村人に信頼されていたということである。浜口氏が「高台へ避難を」と呼びかけると、皆さんは疑問を挟むことなく避難をした。これは、両者の間に信頼関係あつてのなせる業である。

◆以上のようにみてくると、「稲むらの火」を美談とする次元を超えて本来の意味を今日の問い直すことが求められているといえる。私は、「稲むらの火」の本来の意味が「専門家と市民間のコミュニケーション」や「コミュニティのあり方」にあると考えている。よって、「稲むらの火」の教訓としては「専門家が信頼されていること」、「的確に情報が伝達されること」、「皆さんで後世のために備えること」をあげたい。なお、美談追求として意図的な改ざんが必要ならフィクションの世界でやってもらいたいものである。

◆付録： 「稲むらの火」が 国語教科書に掲載となった経緯

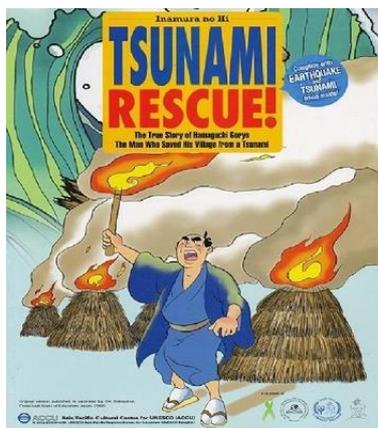
文部省(現文科省)が 1934 年に国語教材を公募し、広川町隣接の湯浅町生まれの中井常藏氏が執筆した「稲むらの火」が入選し、1937 年から 1944 年まで小学の国語教科書に掲載された。中井氏は、執筆に当たり小泉八雲の原本を下敷きにして子どもたちにわかり易く教えるために(津波防災を伝えたい一心で)創意工夫をしたといわれている。

また、これは、当時の文部省の「公のために自己犠牲を強いる」教育方針にそうものであった。事実、当時の国語教師用の本では、「本教材では、その余情を受けて、郷土・村民を愛護するために尊き犠牲的精神を発揮し、天災地変の間によく多くの人命を救助した五兵衛の崇高な行為に共感させようとするものである。」と記されている。

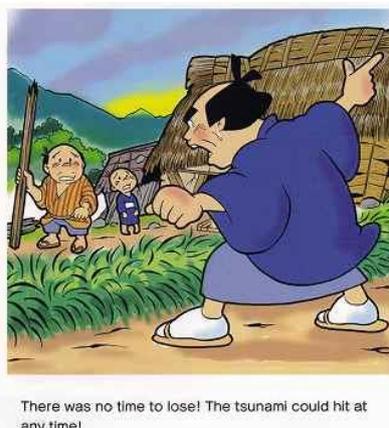
かくして、原文とは別視点で我らの知っている「稲むらの火」が生まれたのである。なお、広川町稲むらの火の館には、「稲むらの火」の史実に基づいた原文が展示されている。



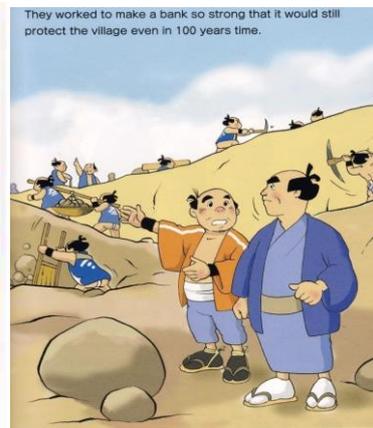
国語の本にある稲むらの火の挿絵



絵本の表紙



避難呼びかけ



堤防建設

PS：出展：国語本は稲むらの火の館 HP より、絵本は Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO より